

の祖は百済の久米都彦だと言われているとある。また、菟野(うの)の馬飼氏の祖は新羅の皇子、金庭興(キムジョンファン)だと言われているという。それに、「こま」とは主に高句麗人を意味するが、古代日本における「こま」は古代韓国人を指す総称でもあったと李寧照さんは「もう一つの万葉集」(文春文庫)で語っている。

そうしたことを踏まえて思うのだけれど、馬の背にも似た生駒山地の山麓で牧を営むのに必要の高い技術をもった渡来の集団は、地縁や血縁をつなぎつつ、高句麗も新羅も百済の別もなくなっていたのであろう。けれど、出自への誇りと祖先と山への報恩の心も忘れないという、二重三重の意味を込めて、大和からも河内からもよく見える、標高642メートルの生駒山を「尊いこま人」の象徴として畏敬の念をもって仰いできたのではないかと、推理してみる。

「生駒姫! あなたの名前の由来を検証してきましたが、もやの中から、生駒姫と命名された父母の深い思いが千年の時空を越えて伝わってきますよ」とつぶやきつつ、この項を閉じ、万感の思いを込めて、「望月の駒」を語ってみたい。

## おはなし

## 望月の駒

昔、望月の牧は、朝廷に差し出す馬を飼育していたので「御牧」と呼ばれていた。そして、よい馬を育てることで、その名は世間にとどろいていたそう。

ある年の満月の晩げのこと、御牧の中にある館に女の子が生まれた。お湯を浴びせてもらい、産衣にくるまると、かかさまの脇に連れて来られた。

「まあ! なんて愛らしいこと」

「ほんに。まあまあ、生まれたばかりなのに、もう微笑んで……」

「ええ。赤ちゃんが笑うのは、神さまや仏さまがあやしているんだそうですって」

そばにいた女衆は口々にほめそやしながら部屋を出ていくと、すぐにお館さまがやってきて、

「よい子を生んでくれた」

と、奥方さまをおほめになった。

「さて、名前だが、生駒姫という名はどうだろう」

